

大学・高専機能強化支援事業
令和6年度現地調査報告書

大学・高専機能強化支援事業選定委員会

調査日	令和6年11月11日(月)	区分	支援2大学(一般枠)
選定年度	令和5年度	大学名	群馬大学
設置等組織名	<修士>情報学研究科情報学専攻	設置・定員増員年度	<修士>情報学研究科情報学専攻(R6設置)
事業計画名	デジタル社会に貢献する群馬大学における実践的大学院教育		

1. 進捗状況の概要

(1) 事業計画の具体的な取組の進捗状況

・事業計画がおおむね計画通り進捗していることが確認できた。
 ・学士課程の完成年度を待たず1年前倒して修士課程を開設しているため、開設初年度は入学定員60名に対して47名(群馬大学から33名、社会人4名、留学生9名、他大学1名)と未充足だったが、様々な広報を実施し、完成年度を迎えた来年度の学生確保については既に34名(群馬大学から29名、社会人1名、他大学4名)が確保されており、さらに冬季入試を実施することでの確保の見通しが立っている。

(2) 好事例や把握された事業の成果

・社会人学生が学び直しの良さのみならず、多様な学びを行っている学生が互いに刺激を受けることのできる文理融合の大学院の良さを理解しており、また、その他の学生も学びを深め、大学院の学びの意義を理解し、満足していた。

・数理データ科学教育研究センターで文系志向、理系志向の得手不得手のある学生を取りこぼさないようオンデマンド教材の開発と活用を進めている。

2. 指摘事項(留意事項・参考意見)

(参考意見)

・入学定員170名という学士課程の資源の活用という面では不十分である。持っている多くのリソースを再点検し、広報以外にも学生を大学院に引き上げるための積極的な制度、新しい工夫を行う必要がある。特に女子学生が約4割と多い状況を失わないよう、文理融合をさらに進める努力に加え、人文社会系の学びもできることを周知しているなどの情報発信の継続を期待したい。

・施設・設備の整備状況について、現時点は学生が皆、施設・設備に概ね満足しているものの、研究室が手狭な点には不満を持っているため、今後、60名の定員が充足された際の学修環境には懸念がある。

・学生は未だに「自分は文系」、「自分は理系」という認識にとどまっているため、例えば学士課程の基盤教育カリキュラムの段階から文系、理系がそれぞれの得意を伸ばし不得意を補いながら、一緒に社会課題の解決に取り組む融合プロジェクトを設定し、さらに学部学生に大学院生が教えることで、横だけでなく、下とも上手く連携した相互の学びによって、学部から大学院への接続にもつなげるなど、大学として文理融合の理想を実現するためのさらなる取組が必要である。

・文系志向、理系志向によって学生の学びたいタイミングにずれが生じやすいため、数理データ科学教育研究センターでオンデマンド教材の開発と活用を進め、学びたい時に振り返って学ぶことができる環境を整えることは、文理融合の基盤として重要であり、さらなる活用を期待したい。